

平成 30 年度採択 ふしゆぬ

PROJECT TITLE

星の民話収集プロジェクト



PROJECT MEMBER

品川 玲央 (左)

理学部 物質地球化学科 物理系 3 年 (採択当時)

長嶺 実来 (右)

理学部 物質地球化学科 物理系 2 年 (採択当時)

プロジェクト内容

BEFORE

- 沖縄本島・久米島の星にまつわる民話・神話を収集
- 小冊子作成



AFTER

- 久米島の太陽石の現地調査
- 辺戸の星窪の調査
- 三つ折りパンフレット作成

STORY

大きな軌道修正を経て 星の民話から太陽石へと着地

「ふしゆぬ」とは、沖縄の方言で「星の夜」を意味する。琉大の天文サークルに所属していた 2 人は、この 1 年前にも「おきなわ宇宙教室」という名前でちゅらプロに参加。その中で来場者から、天文学的な話だけでなく星の民話や神話も聞きたいという話があったこと。国際天文コミュニケーション会議で発表をした際に知り合ったマレーシアの大学院生が、星の民話を集めていたこと。そして一番は、プロジェクトリーダーとなった長嶺さんが長年星の民話を集めたいと思っていたことなどから星にまつわる民話を集めるプロジェクトとして応募。採択されるに至った。

しかし、いきなり大きな難問に直面した。戦前の記憶を持つ方に話を聞く最後のチャンスだという想いを胸に訪問した沖縄伝承資料センターでは、既に何年も前に民話の聞き取り調査を行っていたのだ。その時点で星にまつわる民話を知る人は既にほぼ居なかったことを知らされた。そこでメンバーは急遽大きく軌道修正。おきなわ宇宙教室などでも縁のあった久米島にサポート教員と共に渡り、久米島に伝わる太陽石（ウティダ石）について調査することにした。

久米島を歩いて目の当たりにした言葉の壁 しかし島民の方々は優しく迎えてくれた

太陽石とは、太陽の位置を定点観測して暦を知るために先人たちが利用していたいわばカレンダーのようなもの。現在は地形も変わり木が生い茂っているためこの場所からは海が見えないが、かつては石に刻まれた印の位置から海の方角を見ると夏至には粟国島の上から、冬至には久場島の上から太陽が昇っていたという。その太陽の昇る位置を種まきや収穫などの時期の目安として農作業に役立てていた。



比屋定の太陽石

比屋定にある太陽石は既に有名で、久米島の観光名所にもなっているが、来島して最初に訪問した久米島博物館で、太陽石は島尻にもあることを知った。正確な位置までは博物館でも分からなかったためとりあえず島尻方面に車を走らせ、近くを歩いていたお年寄りに尋ねてみることに。沖縄本島のものとは異なる久米島の方言が聞き取れずメンバーは苦心したが、島の人とはとても協力的で太陽石を知るといふ男性を紹介してくれた。



太陽石を知る方の案内により、場所を特定し実物を確認することが出来たが、島尻の太陽石は戦後の護岸工事で大きな石が必要になった際に切り出されてしまい元は 140 センチほどあったものがバラバラに。さらに畑にするために移動されていた。この地域に住んでいた人々は、これが太陽石であるということは知っていたようだが、案内してくれた方を含め、その使い方までは知らなかったという。



島尻の太陽石

もう一つの調査は「辺戸のふしくぶ（星窪）」

沖縄本島北部、辺戸岬の近くに「星窪」はある。星窪とは隕石がおちた跡のことで、こちらもほとんど文献は残されていなく、実在したものなのか真偽は不明とされていた。そこでプロジェクトメンバーは、大石林山で働く地学科の先輩に辺戸区公民館の平良区長を紹介してもらい話を伺った。



平良さんから、国頭村史の史実検証を行っていた宮城樹正さんが 2017 年に星窪を調査した際の資料を見せていただいた。その中には、北国小学校の 5 年生が昭和 55 年に現地調査した際の手書きの地図やイラストにより場所や形、サイズが書き記されたレポートもあり、今となってはほぼ跡形もない星窪が具体的にイメージできるものだった。現在はその場所に道路が通されており縁の部分のみが残されるのみだが、資料によると星窪は縦約 13m、横約 20 メートルの楕円形で、深さは 3m ほどあったという。また、貯水池と利用されていて、周辺の水田に水を引いたり、大正 5・6 年頃にサトウキビの生産が始まってからは、サトウキビを絞るための水車を動かすのにも使われていたそうだ。

プロジェクトを通じて見えたもの

ふしゆぬのメンバーは冬至の日に久米島を再訪して太陽石の正確さを確認した他、現地での聞き取り調査と、文献資料をまとめて最終的に「沖縄の星の文化」と「久米島の太陽石」というタイトルで 2 種類のパンフレットを作り上げた。制作はパワーポイントを駆使して自作し、イラストは琉大の卒業生である理系漫画制作室の「はやのん」さんに格安で描いてもらった。成果物として WEB ではなく紙に残すことにこだわったのは、今回の調査で協力していただいた方々がほとんどが年配だったため。お世話になった方々に手にとって見てもらおうと、1000 部ずつ印刷し関係者に配布した。



品川「学生の間まわりにはいるのは同年代の人ばかりで、これほどまでに地域の方々と触れ合う機会はなかったので本当に貴重な機会だと思いました。私は県外出身なので、久米島のお年寄りの話す言葉が全く分からないことが衝撃でした（笑）。今回本当に沢山の人が協力してくれて、我々のやっていることは自分たちが思う以上に価値のあることなのだと感じました。社会人になった今、学生の間にもこのようなことが出来てよかったと思います」



長嶺「念願だった星の民話は集められませんでした。ずっとやりたと思っていたことを実行するすごい機会を得ることが出来ました。民話が集まらなかったことはまったくの想定外。最初に躓いて計画が崩れてしまい、最後の最後ですごく焦って苦しい思いをしたので最初にガチガチな位しっかり計画を立てることの大切さを実感しました。それでも最終的にカタチにすることが出来たのは、プロジェクトのメンバーやサポートしていただいた先生、取材先でお話を聞かせてくれた方々などのおかげです。私達の調査の為に時間を割いてくれた皆さんにお返し出来たら良いなと思いながらこのパンフレットを作成しました。このプロジェクトは決して一人ではやり遂げることはできなかったと思います」

成 果

- 久米島でもう一つの太陽石の場所を特定
- 再度久米島を訪問し、冬至の日に比屋定の太陽石を観測し正確さを確認
- 沖縄本島版、久米島版のパンフレットを作成

パンフレットダウンロード

- ・ 沖縄の星の文化
- ・ 久米島の太陽石